

## 「恩賜の煙草」の儂い有難味

天皇家からのご下賜品として長らく名誉とされていた「恩賜の煙草」が、2006 年生産中止された。

メキシコ・オリンピックのサッカーで見事銅メダルを獲得した日本代表チームが帰国後皇居に招かれ、「恩賜の煙草」をいただいたとエース・ストライカーだった釜本邦茂氏が語っていた。

恐れ多くも菊のご紋章が印された名誉の煙草を拝受した、当時若かったアマチュア・サッカー選手たちもさぞ面食らったことであろう。

メキシコ大会の4年前、東京オリンピックに先立つ 1964 年1月、国体スケート競技が箱根スケートセンターで行われた。開会式にご臨席のため、当日皇太子ご夫妻(現天皇・皇后両陛下)が小田急ロマンスカーで箱根へ向かわれた。鉄道会社では不測の事態に備えて、ご乗車の数時間前から段階的に警戒度を引き上げ、トラブル防止と対応に遺漏ないよう万全の警戒態勢を敷いていた。

その当時見習い駅員だった私も、駅の1昼夜勤務が明けてそのまま近くの無人踏切のにわか踏切番に配置され、電車の運行に支障を来さないよう周辺の警戒に当たっていた。

幸いすべてのスケジュールが恙なく終わり、皇太子ご夫妻が箱根から無事お帰りになられた数日後、宮内庁から当日警戒に当たった現場の駅員らにねぎらいのご下賜品が届けられた。それが名誉の「恩賜の煙草」だった。その情報は事前にそれとなく耳に入り、煙草好きで昔気質の先輩駅員らは感激し、各人が1箱ずついただけるものと楽しみにしていた。ところが、想定以上に多くの駅員が安全運行に協力した結果、「恩賜の煙草」はとても足りなくなり、いただけるのは結局2人に1本ということになった。

考えてみれば無理もない。だが、2人に1本の煙草を平等に分けるにはどうしたらよいか。職場ごとに当日関った駅員の半数分の煙草が届けられた。くじ引きで決めるか、真ん中で裁って二分するか。煙草を嗜まない私は、日ごろ世話になっていた煙草好きの先輩に荣誉ある権利を譲った。

しばらくして出会った先輩からこう言われた。「もったいなくて喫えねえよ。神棚に飾ったままさ」。